

# GANEF Oに参加して（遺稿）

（2011年4月逝去）

ガネフォ水球

菅久尚武（生誕82年）

（中央大学出身）

この遺稿は、1963年（昭和38年）11月にガネフォに出場して、ジャカルタの選手村宿舎に於いて書かれたものです。誰宛かは不明です。

新興国競技大会すなわち GANEF O (Games of the New Emerging Forces) は、全世界注目のうちに11月10日午後4時30分インドネシアの誇るスナヤン大競技場で参加国52ヶ国の入場式の後、聖火台に火が灯された瞬間に始まった。

全世界がなぜ GANEF O を注目しているのか？

最初この点について私の目で見えた感想を簡単にまとめて皆さんにお知らせ致しましょう。

新興国家の多いアジア、アフリカの諸民族が、自己を取戻そうとした力から出た感情の現れであり、既成国家に対し新興国家はスポーツの「力の結集、力の進展、力の行使」により一丸となって進む事で既成国家のレベルに到達させたいと願う非力の者達の気持の集りが「ガネフォ」であります。既成国家はこのガネフォ大会を認めながら、反面苦々しい思いでいる。



ガネフォ開会式 午後4時30分を指す時計

それは何故か？ スポーツの発展のみにとどまらず、政治、経済の面に於いてもいずれは自分達が苦しまなければならないだろうと非常に消極的かつ保守的な考えが一部に強いためではないでしょうか。

次に私達が連盟を脱退してでもガネフォに参加するのは、IOCは19世紀の性質と精神を持続け、機構組織はもはや20世紀の時代の要求に適応しない旧態依然としたものであります。同じように日本におけるスポーツ団体も中央集権的、封建的なものでしかありません。アマチュア選手とは、自由にスポーツを楽しむ個人の権利がありながら、現在は連盟という名のもとに選手を「制約」する一部の人による圧力団体となり、アマススポーツ本来の精神を見失いつつあります。私達東京水球クラブがガネフォ大会参加にふみきった動機は、これらいろいろの問題を考えた末、一部の「非難」を受けても必ずや世界の、日本のスポーツ界は新しい世界の「鼓動」に目覚めるものと信じその少ない「布石」となればと考える気持が強かったからであります。

インドネシア人は日本選手に対し友好的です。チョット話合ってもすぐにニコリ笑ってインドネシアと日本はサマサマ（一緒）と言ってくれます。私達が一番嬉しかったのは、それはスポーツこそ真の交友を深めるものであると改めて感じたことです。

インドネシア政府の役人スマクノ氏は、私達と同行しながらメイドバイジャパンと誇らしく言ってくれました。また、高級車にまじりユーモラスに走る小型自動車もメイド イン ジャパン、ベリーグッドです。日本大使館の招待晩餐会の席上、大使館の某氏はアジアの先進国である日本が今、インドネシアに対する「賠償」で、その国家的プラスをかりうじて守っているが「賠償」問題が終結した場合、今後の具体案が無い現状では残るのはスポーツであると強く私の手をにぎり話して下さいました。

インドネシアは今インフレで貧富の差が激しく中産階級はごく少ないようです。この問題についてインドネシア留学生（慶応大学2年電気工学専攻）マルハタ君は明解に答えてくれました。

「インドネシアには労働力がありあまっている。ゴム、石油も豊富である。しかしこれらを使い、また消化する工業力が無いのだ。自分は現在日本の優秀な技術を学んでいる。自分達若い者達が、あらゆる国の優秀な技術を吸収して10年先には、現在の10倍の生活水準にする確信がある。」

インドネシアの若者達は、現在自分たちは何をしなければならないか良く知っているようでした。

最後に大会の現況について

昨日柔道の試合が終わりましたが、日本は4階級中、金メダルは1個。すでに日本の柔道は一線級の選手でないと外国選手と「互角」に戦うことは不可能なのかと、一抹の寂しさを感じました。

私達東京水球クラブが最後の金メダル候補となり「独立愚連隊」最後の決戦と選手一同はりきっております。

試合の組合せは今日決定しました。17日が事実上の優勝戦と思われ、東京水球クラブ対インドネシアの一戦があります。あとはアルジェリア、アルゼンチン計4か国の参加です。インドネシアはナショナルチームで現在の日本ナショナルチームと力は互角と見なければならず、相当激戦となるものと覚悟しております。いずれにせよ全力で戦うつもりです。この便りが日本に届く前に試合成績は報道されているでしょう。

ガネフォはインドネシアの国をあげての行事で、批判して申訳ないような気もしますが、私の感じた所では

- ① 「インドネシア時間」と私達は言うのですが、まず時間通りに行われたことがない。
- ② 練習時間が度々変更され、当日でないと分らない場合が多々あり、練習計画を立てられない。
- ③ 専属通訳がいいため不便である。
- ④ 選手村の設備があまり良くない。
- ⑤ 食事は洋食、支那、インドネシアと三部門に分れているが、いずれも大差なくヤシ油が強く下痢患者が続出している。
- ⑥ 軍隊が武装して運営に当たっているが、あまり感心したものではない。

これらもインドネシアの現状で精一杯の努力による結果であり、無理を言う方がおかしいことかもしれません。

最後にマラディースポーツ大臣は、日本選手の一部に次のようなことを非公式に話した。「インドネシア共和国は、アジアの先進国である日本の参加をこれほど嬉しく心に強く思ったことはない。これに対する私達のお返しは1964年東京オリンピックの成功に協力する意味で、純粋な気持ちから参加するであろう・・・」と。

私はこの言葉を聞いた時、私達の役目は半ば達成されたと感涙の思いでした。11月末に帰国する事になるでしょう。冬に入り寒いでしょうが私達は、胸を張って帰国致します。